

彰義隊（向山黄村）

戊辰 五月 此の山中

劫火 天を焼いて 草木 紅し

志士 元を喪うも 一死に 甘んじ

親臣 主に 酬いんと 孤忠を 表わす

応に 知るべし 百計 千方の 尽くるを

坐して 受く 三軍 四面の 攻

厲鬼 今に おいて 猶お 夜 哭す

啾々として 万壑に 悲風 動く

戊辰五月此山中 劫火焼天草木紅
志士喪元甘一死 親臣酬主表孤忠
應知百計千方盡 坐受三軍四面攻
厲鬼于今猶夜哭 啾啾万壑動悲風

解説 戊辰戦争の時、江戸城無血開城後、上野の山にたてこもり、官軍と戦った彰義隊の行動と悲劇を詠じたもの。

語釈 ※劫火Ⅱ大火災。 ※焼天Ⅱ焦天に同じ。火勢の強烈なさま。 ※志士Ⅱ高い志を持った人。また、国家、社会のため自分の身を犠牲にして力をつくそうとする人。 ※親臣Ⅱ君主が心から親しみ信頼する家臣。 ※孤忠Ⅱ他人の援助なく、おのれ一人にて尽くす忠義。 ※百計千方Ⅱいろいろな工夫手段を尽くすこと。 ※三軍Ⅱ大軍の意。 ※四面Ⅱ四方から攻められること。 孤立して援助なく、四方みな敵の意。 ※厲鬼Ⅱ祀られないで恨みながく戦死者の魂。 ※啾啾Ⅱ亡霊がなく声。 ※悲風Ⅱ悲哀の情をそそる風。 秋風の意もある。 ※動Ⅱ騒に同じ。

通釈 慶応四年五月も半ば、上野山中の彰義隊に加えられる官軍の砲火は寸刻も止む時なく、雨霰と降り注ぎ、燃えさかる火勢は天をもこがほど、夏草も紅く染めている。ここに籠る志士たちは首を失うのは覚悟の上、奮闘よく一死に甘んじ、主君の恩に酬いようと、一兵の援軍もなき戦いを天下に示して斃れたのである。大村益次郎指揮の布陣は、蟻の子一匹這い出る隙もなく、包囲もしだいにせばめられ、あらゆる作戦もすべて甲斐なく、それこそ坐ながらにして三軍四面の攻めを受け、潰えた。その悲憤の情は、今なお鬼となつて、声あげて泣き、悲しみの声は、風に乗つて、上野・谷中の谷々を埋めて響くかのである。